

1 漢字に対する興味や関心を高めるために、具体的な物や絵と漢字の字形を結び付けた指導について（1年）

	<p>【板書事項】</p>
<p>【指導の流れ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「今日の漢字は、『大きい』です。」 2 「漢字は、形からできているのですよ。『大』は、何からできたのでしょうかね。『大』は、人が手と足を広げて、立っている形からできたのですよ。」 3 「みんなでやってみましょうか。」 4 「立って、手と足を広げて、体で『大』の字を作る。」 5 「では、書いてみますよ。『横・左はらい・右はらい』」 6 「みんなで書いてみましょう。」 7 「一緒に楽しくリズムカルに唱えながら、大きく空書きする。」 8 「机の上に、指書きしましょう。筆順に気を付けて書きましますよ。『横・左はらい・右はらい』」 9 「鉛筆で書いてみましょう。」 10 「漢字スキルノートを活用し、書いて練習する。」 11 「『大』が、どんな形からできた漢字が分かりましたね。おもしろいですね。」 	<p>【留意点】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 一年生の漢字は、具体的な形からできているものが多いので、毎回、同じ流れで指導することで、漢字の成り立ちをより意識させて指導できる。 2 説明をしながら、成り立ちの絵を板書する。 3 人の体の動きからできている漢字は、実際に体で表現することで印象付ける。 4 唱えながら、まず目黒板にゆっくり書いていく。「横・左はらい・右はらい」という書き方を表す言葉の約束は、ずっと使えるので、学級として統一しておく。（特に、「はね」「や」「まがり」など） 5 空書きでは、教師が腕全体、体全体を使い、大きく書くことで、児童に筆順と字形を意識付ける。この時、教師が児童と向き合って、児童と目を合わせながら行い、児童の手の動きを引っ張るような意識をもって行くと、学級全体の「しっかり書こう」とする気持ちが高まる。 6 市販の漢字スキルノートは、なぞり書きと一人書きの両方のますのあるものを選ぶと指導しやすい。 7 教師が、『具体的な事物（実物や絵）と漢字の字形が結び付いていること』をおもしろいと感じていることを児童に伝えていく。
<p>参考文献 「下村式 唱えておぼえる漢字の本 1年生」 （偕成社）</p>	

1 漢字に対する興味や関心を高めるために、具体的な物や絵と漢字の字形を結び付けた指導について（1年）

<p>【板書事項】</p> <p>なかま分けゲームをしよう</p> <p>・かず 一 二 三 四 … 百 千</p> <p>・ひと 人 男 女 子</p> <p>・からだ 目 口 耳 手 足</p> <p>・よう日 日 土 火 … 土</p> <p>・いろ 青 赤 白</p> <p>・しぜん、てんき 山 川 林 森 田 花 草 竹 石 夕</p> <p>・ばしよ、べんきよう 町 村 学 校 文 字 先 生 本 名 年 齢</p> <p>・うごき 出 入 見 立 休</p>	<p>【指導の流れ】</p> <p>1 一年生で習ったすべての漢字を仲間分けするゲームをする。 「これから漢字仲間分けゲームをします。グループごとに漢字をなかまに分けましょう。」</p> <p>2 教師が仲間分けするグループを先に示しておき、それを基に仲間分けをさせる。 ほかにも、 「いきもの」… 犬 虫 貝 「天気」 … 雨 天気 空 など児童にグループを考えさせるのもよい。</p>	<p>【留意点】</p> <p>1 この場合は、学年末に八十字すべてを学習した後に仲間分けすることを想定している。 このほかに、先に項目を示しておき、新出漢字を学習するたびに仲間分けを行っていく方法も考えられる。</p> <p>2 仲間分けをしながら新出漢字の学習を進めることで、それぞれの漢字を関連付けながら覚えることが期待される。</p>
--	---	--

1 漢字に対する興味や関心を高めるために、具体的な物や絵と漢字の字形を結び付けた指導について（2年）

【板書事項】



【指導の流れ】

- 1 漢字を板書し、読み方を教える。
「これ(回)は『かい』と読みます。
『まわ(る)』とも読みます。」
- 2 象形文字であることを伝え、基となった絵を想像させる。
「これは、回る様子からできた漢字です。どのような様子からできたと思いますか。」
C「校庭など、回って走るところです。」
C「答え合わせの丸付けの丸です。」
- 3 「指をぐるぐる回す形です。」
字のでき方を教える。
「回が水が回っている様子からできた漢字です。(掲示資料提示)この絵のどこから回ができたと思いますか。」
C「水がうずになっているところ。」
- 4 空書きをし、書き取り練習をする。
「回は六画です。空書きをします。指を出しましょう(空書き)。ノートに練習しましょう。」

【留意点】

- 1 筆順を意識させるために、ゆっくりと大きく書く。
- 2 象形文字は、漢字の形から基となった絵を考えさせる。基となった絵から漢字を考えさせると、児童独自の文字が多く出されて、『回』にまとめるのが難しくなる。
自由に想像させ、児童一人一人の考えを認める。それぞれがどのような理由で基になった絵を考えているかを共有させ、絵と漢字の意味のつながりを意識させる。
- 1 児童が発想したものを、正解・不正解といった観点でとらえさせないようにする。それぞれの発想が漢字の意味と関連している点から認める。
- 4 「一、二…」と一画ごとに数を数えながら空書きさせる。
空書きで書けるようになってからノートに練習させる。その際、「一回」「二回」「回る」など、熟語や送り仮名のある形で練習させる。

1 漢字に対する興味や関心を高めるために、具体的な物や絵と漢字の字形を結び付けた指導について（2年）

<p>初…初めて、さい初</p> <p>券…入場券、食券</p>	<p>・分ける ・五分間</p> <p>・切る ・切手 ・親切</p>	<p>【板書事項】</p> <p>刀（かたな）</p>
<p>3 「刀」を部首にもつ未習漢字「券」「初」などを示す。</p> <p>「刀」が入っている漢字には、ほかになんなものがあるでしょうか。</p> <p>「券」や「初」などがあります。何と読むでしょうか。</p>	<p>2 「刀」を部首にもつ既習漢字「切」「分」の成り立ちを教え、熟語を挙げさせる。</p> <p>「切」はこのように木を切る様子からできました。「分」は、刀で半分に切った形からできたそうです。この漢字を使つ言葉を考えてみましょう。</p>	<p>【指導の流れ】</p> <p>1 漢字「刀」を板書し、象形文字であることを伝え、成り立ちを教える。</p> <p>「刀」の漢字は、このように「刀」の形からできました。「刀」の付いている字は、刀で切ることに関係があります。漢字の中に「刀」が入っている字を挙げてみましょう。</p> <p>C 「切」「分」</p>
<p>参考資料 「漢字教室 小学2年」（旺文社）</p>	<p>3 児童の実態に応じて、「刀」の未習漢字を紹介し、それらがどのようにしてできたかを説明することとさらに関心を高める。</p> <p>「券」…刀で木を二つに切り、二人でその木切れをそれぞれ持って約束の符号としたことからできた字。</p> <p>「証拠となる札」を意味する。</p> <p>「初」…刀と衣（ころもへん）を合わせた字。衣を作るとき、はじめに刀で布を裁ち切ることから、「はじめ」という意味を表す。</p>	<p>【留意点】</p> <p>1 それぞれの漢字の基になった絵は事前に描いておいたものを黒板にはり、それをくずして見せながら今の字になった過程を示す。</p> <p>2 児童に発表させながら、「切」「分」を用いる漢字とその読み方を示す。</p>

2 表意文字として漢字に対する興味や関心を高める指導について (1年)

【実践例】



「お月さまとうさぎ」



「いっぱいできたよ」



「車に乗って楽しいおでかけ」



「水道から水がジャー」



「ヤッホー、お山に登ろう!」



「たき火だよ、あったかいな」



「竹と田んぼ」



「学校と林」



「山と石と川」

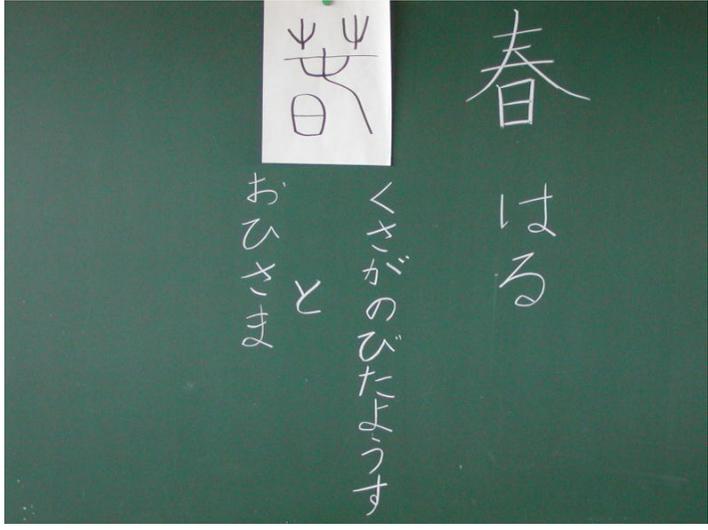
【指導の流れ】

- 1 「今まで、たくさん漢字を勉強してきましたね。今日は、習った漢字を使って、楽しい絵を描いてみましょう。」
- 2 「『山』は、どんな絵からできた漢字か、覚えていきますか。そうですね。山の絵からできた漢字でしたね。絵にできそうですね。」
- 3 「ほかに、どんな漢字がありますか。」
* 児童の考えを板書し、「絵にできそうだな」という意欲付けを図る。
- 4 「いろいろありますね。楽しい絵が描けそうですね。それでは、クレヨンを出して、楽しい絵を描いてみましょう。一枚の画用紙にいくつ描いてもいいですよ。」

【留意点】

- 2 どんな漢字がどんな絵からできたのかを全体で確認してから活動に入ること、意欲を高める。「山」など、どの児童でも描けそうな簡単なものを板書しておくよ。
- 4 教科書巻末の「あたらしくならったかん字」のページを見ながら、既習の漢字をいろいろ思い出せるようにする。
できた作品は教室に掲示し、お互いの作品を見合わせる。掲示することで、漢字の形を印象付け、漢字の理解をより確かなものにする。

2 表意文字として漢字に対する興味や関心を高める指導について (2年)

	<p style="text-align: right;">【板書事項】</p> 
<p>4 空書きをし、書き取り練習をする。 「春は九画です。空書きをします。指を出しましょう(空書き)。ノートに練習しましょう。」</p>	<p style="text-align: right;">【指導の流れ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 漢字を板書し、読み方を教える。 「これ(春)は『はる』と読みます。」 2 会意文字であることを伝え、基となった漢字を想像させる。 「春は、日と上の部分からできた漢字です。日はおひさまを表しています。上の部分はどのようなことを表していると思いますか。」 C「おひさまの上の雲です。」 C「木のある山と川です。」 C「日よけの傘です。」 3 字の書き方を教える。 「上の部分は、前はこういう形をしていました(掲示資料提示)。これは草が伸びて育っている様子を表しています。暖かくなって伸びた草と、おひさまを表した漢字です。」
<p>4 「一、二…」と一画ごとに数を数えながら空書きさせる。 ノートに練習させる際は、「春休み」「早春」など、熟語で練習させる。</p>	<p style="text-align: right;">【留意点】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 筆順を意識させるために、ゆつくりと大きく書く。 2 会意文字は、漢字の基になった漢字を考えさせる。二つ同時に考えさせるのが難しい場合は、一つを教え残りの部分を考えさせる。その際、教えた部分と関係があることを児童に意識させる。 児童には自由に想像させる。一人一人の考えを認める。それぞれがどのような理由で基になった漢字を考えているかを共有させ、二つの漢字の意味のつながりを意識させる。 3 児童が発想したものを、正解・不正解といった観点でとらえさせないようにする。それぞれの発想が漢字の意味と関連しているかという点から評価する。 4 「一、二…」と一画ごとに数を数えながら空書きさせる。

3 筆順を正しく習得させる指導について (1年)

<p>【板書事項】</p> <p>じゃんけんゲームをしよう</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin: 10px 0;"> <p>正</p> </div> <p>あそびかた</p> <p>じゃんけんをする。</p> <p>かった人：一かくずつかく。</p> <p>かん字ができあがった人のかち。</p> <p>* 早くおわったら、二かいせんをする。</p>		
	<p>【指導の流れ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「漢字を使って、じゃんけんゲームをしましよう。」 2 「今日は、『正』の漢字を使ってゲームをします。」 3 「ゲームをするまえに、『正』の筆順を確かめましょう。『よこ・たて・よこ・たて・よこ』ですね。」 * 板書、空書きで確かめる。 4 「ゲームのやり方を説明しますよ。まず、お隣の人とじゃんけんをします。勝ったら、一画ずつ書いていきます。早く漢字が出来上がった人の勝ちですよ。」 5 「それでは、ゲームを始めましょう。」 	
	<p>【留意点】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 紙と鉛筆を準備して始める。 2 正しい筆順でゲームができるように、全員で筆順を確かめ、短冊黒板に色分けして書くなど、どの児童も正しく書けるように配慮する。 3 児童同士で確認しながら、ルールを守って遊べるように、遊び方を簡単に黒板に書いておく。 4 二人で一つの漢字を書こうとするペアがいるので、自分の紙に、それぞれが漢字を書くことについてしっかりと指示する。また、ゲームが始まったら、机間指導をしながら、筆順を正しく書いているか、仲良く遊んでいるかなど、活動の様子を見守る。 5 「右」や「左」など、筆順を間違えやすい漢字を使ったり、日直に好きな漢字を選ばせたり、漢字カードからランダムに選んだりするなど、変化をつけながら楽しく取り組めるようにする。 	

3 筆順を正しく習得させる指導について (2年)

【板書事項】



【指導の流れ】

- 1 漢字を板書し、読み方を教える。
その際、一画目を白、二画目を黄、三画目を赤（以下、白、黄、赤の順で変える）とチョークの色を変え、筆順を視覚的にとらえさせる。
『里』という字です。筆順に気を付けて練習します。」
- 2 空書きをし、書き取り練習をする。
「里は七画です。空書きをします。指を出しましょう（空書き）。ノートに練習しましょう。」
- 3 真ん中の縦画を横画の後で書く筆順のきまりに気付かせる。
「里の上のところは、日と書いてから縦画で真ん中を通して書きます。似た書き方をする漢字には、どのようなものがありますか。」
C「中です。」
C「車です。」
- 4 形は似ているが筆順のきまりが異なる漢字について知らせる。
「次の三つの漢字の中で、『里』と違って真ん中の縦画を横画の後で書かない字が一つあります。どれでしょう。」
C「書 東 由」
「答えは 由です。由の筆順は田と似ています。」

【留意点】

- 1 チョークの色分けでは、あまりに多くの色を使うと筆順がかえって分かりにくくなる。予め児童と順番について決めておくとうい。
- 2 「一、二…」と、「一画」と児童に数を数えながら空書きさせる。
ノートに練習させる際は、「ふる里」など、熟語で練習させる。
- 3 既習の漢字から考えさせる。学習する漢字（今回は「里」と似た左右対称の漢字から考えさせるとよい。児童の発表が少ない場合には、こちらから提示してもよい。
- 4 既習の漢字から考えさせる。「半」「牛」でもよい。「東」「書」は縦画の後に書く部分があるが、「里」の下の横画も縦画の後で書く似た筆順の漢字ある。「こ」では、左右対称の漢字では縦画を後で書くことが多いこと、しかしながら、左右対称の漢字すべてが縦画を後で書くわけではないことの二点を押さえる。

3 筆順を正しく習得させる指導について (2年)

【板書事項】

走

横画が先

士

木
十
茶

たて画が先

上

足
止
点

漢字リレーのスペース

【指導の流れ】

- 1 『走』の字をノートに書いて、筆順も書きましよう。
- 2 (自分のノートに書く。)
- 3 「確かめます。数えながら、一緒に大きく書きましよう。(空書き)」
- 4 「上の部分と下の部分では、筆順が違っていることを確かめましよう。」
- 5 「上の『士』では、一画目が横画で、横・縦・横になっています。」
- 6 「ほかに、横画を先に書く漢字を知っていますか？」
- 7 「木」「十」「茶」
- 8 「そうですね。」
- 9 「2」では、『走』の下の部分を見てみましょう。「こちらは、縦画から始まっています。同じ仲間を見付けましよう。」
- 10 「止」「足」「点」
- 11 「3」よく見付けましたね。正しい筆順で書くと、文字の形がよくなります。」
- 12 「それでは、間違いやすい筆順に気を付けて『漢字リレー』をしましよう。」

【留意点】

- 1 筆順を誤ると書きにくかったり、字のバランスが悪くなったりすることを示してもよい。
- 2 (例 「走」の一画目を縦にすると、横画の左右のバランスが取りにくい。「走」の四・五画目を逆にすると、離れたりはみ出したりしてしまおう。)
- 3 「横画を先に書く字」「縦画を先に書く字」の例は、児童の実態に応じて教師が示してもよい。
- 4 漢字リレーは、筆順に関心をもたせるためにゲーム感覚で行わせる。一人一画ずつ順に書いていき、最終的に指定された漢字をいかに完成させるかを競う(見合っ)ものである。筆順があやふやなときや間違えたときには、チーム(グループ)内で教えたり訂正したりしてもよいことにする。黒板で一斉に行いみんなで見合ったり、紙を配ってグループ内で行ったりと、児童の実態に応じて方法を工夫する。

参考資料「新しいしよしゃ」(東京書籍)

3 筆順を正しく習得させる指導について (1・2年)

【筆順の原則（低学年）】

筆順は、先人の知恵と経験から生まれたものであり、書きやすく、形を整えやすく、読み誤られることがなく、覚えやすい筆運びの順序である。

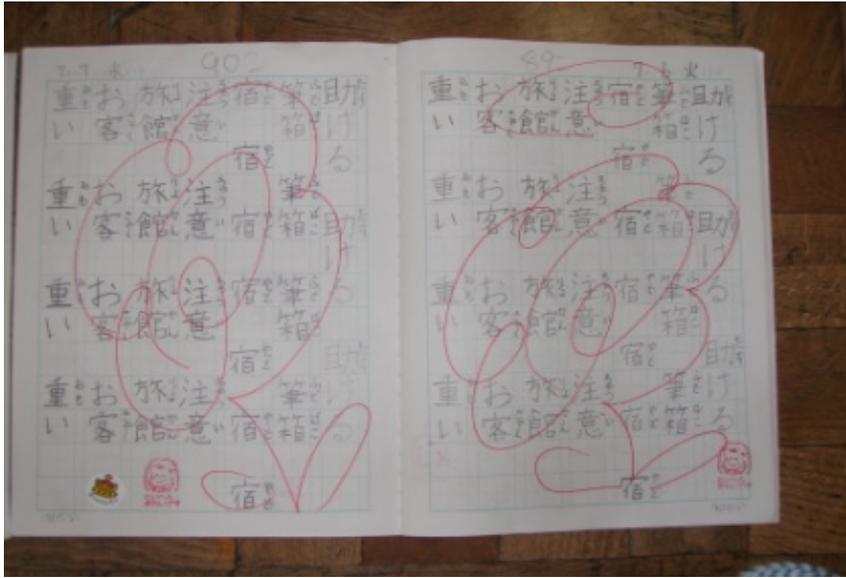
同じ部首や部分では、ほぼ同じ順序で書かれているが、文字によっては幾通りかの筆順が存在しているものもある。従って、必ずしもこれが正しく、それ以外は誤りであるとはいえない面もある。

筆順指導は、昭和三十三年三月に発行された「筆順指導の手引き」(文部省)によって指導されてきたが、昭和五十二年より教科書検定基準として「漢字の筆順は、原則として一般に通用している常識的なものによつてゐること」とされた。

以下に低学年における一般的な筆順指導のあり方について記す。

	6	5	4	3	2	1
		しんじょうは最後	外から内へ	*横画と縦画 *横画が先	左から右へ	上から下へ
中	近	国	十	川	三	
書	遠	凶	牛		言	
	道	円				
		園	長	*縦画が先	*左の部分から右の部分へ	*上の部分から下の部分へ
母			馬	引	岩	
毎				校	高	
	*真ん中を突き抜けるたて画は最後					
	*字のまとまりを横から突き抜ける画は最後					

4 少しずつ確実に漢字の練習を継続させる指導について (1年)



【実践例】

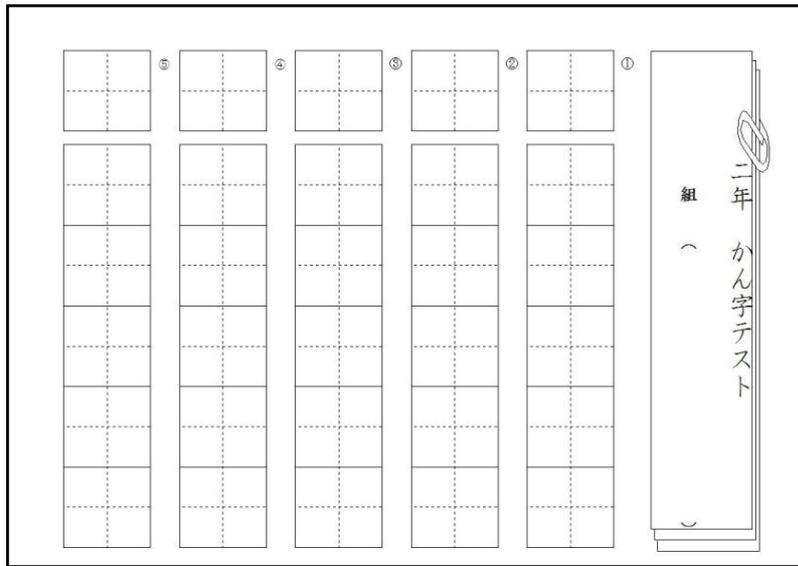
- 1 一日一ページの漢字練習を家庭学習とし、一年間継続する。
- 2 ノートにすき間なくびっしりと書くのではなく、
『森 森 森 森』
『大きい 大きい』
というように、一まずずつ空けて書くことを約束する。(例)

【留意点】

- 1 (例) 文字を丁寧に書かせるため、一まずずつ空けて書くようにする。
新出漢字を学習する曜日を決めておくと、漢字練習のパターンができ、取り組みやすくなる。
例：火曜日：新出漢字を五個覚える。
火・水・木曜日：その五個を一行ずつ練習してくる。(家庭学習)
金曜日：練習してきた五個を小テストで確認し、新しい五個を覚える。
金・土・日・月曜日：その五個を一行ずつ練習してくる。(家庭学習)
火曜日：練習してきた五個を小テストで確認し、新しい五個を覚える。
以上を繰り返していく。
毎回、しっかり評価をしてあげることが大切である。
文字を正しく、とてもきれいに書いている場合には、特別に『葉っぱ付きの花丸』などを付け、きれいに文字を書こうとする児童を育てていく。『葉っぱ付きの花丸』が十個になったらシールを与える。更に、シールが十個になったらキラキラシールをはるなど、ごほうびシールを与えながら児童の意欲を高める。

4 少しずつ確実に漢字の練習を継続させる指導について (2年)

【使用する漢字テスト(例)】



【指導の流れ】

- 1 五問漢字テストをする。
「漢字テストをします。三分間で
す。始めましょう。」
- 2 答え合わせをする。
「答え合わせをします。当たった
漢字は赤鉛筆で丸、間違えた漢
字は青鉛筆で直しましょう。」
- 3 復習をする。
「当たった漢字は、その漢字を使
って短い文を作りましょう。間
違った漢字は五回練習しましよ
う。」
- 4 テスト用紙を回収し、点検する。
「練習を終えたテスト用紙を集め
ます。」

【留意点】

- 1 問題を板書する。
出題する漢字は予め児童に知ら
せておく。学級の実態に応じて出題
数は増やしてもよい。その場合は、
解答時間を五分間としてもよい。
- 2 答えを板書する。それから、机
間指導をし、正しい答え合わせが
行われているか確認する。
- 3 間違えた漢字は、書き取り練習
をさせ、当たった漢字は、短文作
りをさせる。漢字練習は、通常の
ますを使用するが、短文の際は、
四分の一の小さなますに一字を
書かせる(二十字書くことができ
る)。漢字を書くことを習得させた
上で、文中で使うことができるよ
うにする。
- 4 回収したテスト用紙は、正しく
漢字練習ができているか、正しく
短文中で漢字が使われているか点
検する。テストの正答率が目標(例
えば八割)を下回った場合には、
もう一度行うようにする。

4 少しずつ確実に漢字の練習を継続させる指導について (2年)

【提示例】

門

もん＝家の門

校門

走

走る＝はやく走る

走り方

ときよう走

牛

うし＝牛をかう

【取組例】

1 自作の漢字プリントを用いる取組

週初めに十個の漢字が書いてあるワークシート(筆順、音訓の熟語入り)をファイルにとじ、月々金曜日で毎日二つずつ漢字練習帳に書いていくこととする。

練習の仕方は、「指でなぞる」文字の上を鉛筆でなぞる」までをプリントで行った後、自分の練習帳に書く。

練習帳に書く際には、指定した熟語を覚えるまで書き覚えたら同じ漢字を用いるほかの熟語で練習する。

週末に十個の漢字の確認テストを行う。早く終わった児童は、指定された熟語以外にも覚えたいものを書くことさらに点数が加算されるシステムとし、意欲を喚起する。

土・日は、間違った字もこれまでに習った字の復習をする。

2 市販のワークブック等を用いる取組

漢字を指定し、「ワークブックに練習」漢字練習帳に練習の流れて毎日取り組ませ、学級の実態に応じた頻度で二、十問程度の確認テストを行う。

3 教科書の巻末「新しく習った漢字」を活用する取組

毎日二、三個の漢字を指定し、それらを漢字練習帳に書かせる。

4 検定制にし、意欲をもたせる取組

週二〜一回、朝目録や帰りの会などで時間を決めてそれぞれ次の級に挑戦させる。

【留意点】

漢字を板書する際や掲示物を作成する際には、一〜三画目を色別で示し、筆順を意識させる。

検定制にする場合、問題は所定の場所に入れておき、児童が自由に取って練習できるようにする。

5 文や文章の中で読ませる指導について (1年)

<p>おいしいおいしい水でした。 (男)</p>	<p>きれいな貝をひろいました。 (美)</p>	<p>花村さんがいった。 (介)</p>	<p>中は、とてもひろいのです。 (子)</p>	<p>【板書事項】 かん字を見つけよう。</p>
<p>【指導の流れ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 「これまで、たくさんの漢字を習いましたね。今日は、学校の図書室の本の中から、漢字の出てくる文を見つけて、ノートに書いていきましょう。習っていない漢字でも、読み方を知っている漢字は、使ってもいいですよ。」 2 「さあ、では、好きな本を持ってきましょう。漢字探しゲームを始めます。時間は二十分間です。」 3 「時間になりました。それでは、見つけた文の中から、好きなもの一つ選びます。選んだ文を書き方ペンを使って、大きくカードに書きましょう。」 4 「みんな、書き終わったようですね。それでは、グループごとに前に出て、発表してもらいましょう。どの本から見つけたかも、お話ししましょうね。」 5 「今日は、漢字を使った文をたくさん見つけて、みんなで読むことができましたね。」 				
<p>【留意点】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 どの本から見つけたかを紹介しながら発表すると、図書室の本に親しむ活動ともなり、読書意欲の高まりにつながる。 2 本の扱いは、丁寧にするのを確認する。 3 短冊に切った画用紙に見つけた文を書かせ、全員が書き終わったらグループごとに発表させることを確認する。 4 発表の仕方の話型を指示してから、発表会を始めるようにする。学級の児童数を考え、一年生が集中して活動できるような発表の仕方を工夫するとよい。 漢字が一つ入っていたら一点、二つ入っていたら二点…というように、ゲーム形式にすることもできる。 全員のノートは、必ず確認し、児童の漢字の習得や興味・関心の様子を把握する。花丸を付けるなどして、「漢字を使った文を本の中から見つけたこと」をほめ、児童の学習意欲を高める。 短冊カードは、教室に掲示する。 				

5 文や文章の中で読ませる指導について (2年)

<p style="text-align: right;">【板書事項】</p> <p>一 図工室で 図画を かく。</p> <p>二 兄が 上京する。</p> <p>三 朝会で 校長先生の 話を 聞く。</p> <p>四 海水よくに 行く。</p>	<p>【指導の流れ】</p> <p>1 一と二の文を板書し、読み方を考えさせる。</p> <p>「この文を読んでみましょう。」</p> <p>Ｃ「すこつとつでずがをかく。」</p> <p>Ｃ「あにがじょうきようする。」</p> <p>「教科書で習った読み方を使うと、教科書で習っていない言葉も読むことができます。」</p> <p>2 三と四の文を板書し、読み方を考えさせる。</p> <p>「この中には、教科書で習ったことのない読み方の漢字があります。読んでみましょう。」</p> <p>Ｃ「ちようかいでこうちようせんせいのはなしをきく。」</p> <p>Ｃ「かいすいよくにいく。」</p> <p>「朝会はあさの会と考えると読むことができます。海水はうみの水と考えると読むことができます。」</p> <p>3 教科書に出てこない言葉の読み方をまとめる。</p> <p>「教わった読み方を使うと、初めて見た言葉も読むことができます。また、漢字の意味を考えると、読み方を知らない言葉も読むことができます。」</p>	<p>【留意点】</p> <p>1 黙読しながら待つように働き掛ける。「心の中で読みながら待ちましょう」。一と二の文は、読み方は既習であるが、既習の教材文中では未出の言葉を用いる。正しく読めない場合には、教師側から読み方を教え、教科書のどこで習った読み方であるかを知らせる。</p> <p>2 1と同様に黙読しながら待つように働き掛ける。この文に用いる漢字は既習であるが、読み方は未習であるものを用いる。漢字が使われる言葉は、児童の身近なものとし、意味から読み方を推測できるものとする。</p> <p>読み方を答えた児童には、どうしてそう考えたのかを話させ、意味と読み方のつながりをとらえさせる。</p> <p>3 教科書で未出の言葉の読み方を上記の二点でまとめる。1と2の読み方の練習問題を行ってもよい。読書活動につなげていくのもよい。</p>
--	--	--

6 文や文章の中で使うようにさせる指導について (1年)

【板書事項】

文づくりゲームをしよう。

赤い花がさいている。

木のちかくで休む。

水をのむ。

人

中
白
日

山
川
本

口
目
犬

【指導の流れ】

- 1 「今日は、今までに習った漢字を使って、文作りゲームをしましょう。」
- 2 「漢字カードを黒板にはりますよ。一緒に読んでみましょう。」
- 3 「少し練習してみようね。」
 (『白』のカードを提示しながら)
 『白』を使って、文ができた人はいますか。」
- * 『白くまがいる』『白い帽子をかぶる』など、児童の考えをいくつか発表させ、文の作り方を確認する。
- 4 (『白』のカードを黒板に戻してから)
 「やり方は、分かりましたね。それでは、ゲームを始めましょう。カードは、一枚十点です。何枚のカードを使えるかな？グループで協力して、頑張りましょう。最初は、グループの挑戦です。制限時間は、三分。それでは、用意、始め。」
- 5 「時間です。止め。できた文をグループに読んでもらいましょう。どうぞ。」
- 6 「上手にできましたね。グループは、カードを八枚使ったので、八十点です。次は、グループの挑戦です。」

【留意点】

- 1 単元の終わりなどに、既習の漢字を使って習熟を図る。
- 2 漢字カードの裏に、マグネットシールをはり、児童が扱いやすいようにする。漢字カードは、一枚ずつ声に出して読みながら、読み方を確認する。
- 3 例文を示す時には、『白くま』だけでなく、『白くまがいる』というように、言葉作りではなく、文作りであることを意識させる。
- 4 制限時間やグループの人数は、学級の児童数によって調整する。
- 5 班全員で声をそろえて読むように指示する。
- 6 同様にして、全部のグループが終わったら、『今日のチャンピオン』を決める。
 順番の決め方は、『数字カード』を使ってくじ引きにするなど、工夫すると、より楽しくゲームが始められる。
 「うまいね。」「おもしろい文だね。」「これは最高にいい。」など、できた文をほめ、漢字を使って文を作るおもしろさを味わうことが出来るようにする。

6 文や文章の中で使うようにさせる指導について (2年)

<p>【板書事項】</p> <p>一 きょう室で 大きな 音が きこえました。</p> <p>二 おとうとが 日きを書きました。</p> <p>三 ひがしから かげが 歩いてきました。</p> <p>四 はるやすみに ほんをよみました。</p>		
	<p>【指導の流れ】</p> <p>1 一の文を板書し、音読させる。 「この文には、漢字で書くことができる言葉が二つあります。漢字を使って文を書きましょう。」 C「教室で大きな音が聞こえました。」</p> <p>2 二の文を板書し、音読させる。同じように漢字を使わせてノートに書かせる。 C「弟が日記を書きました。」 「習った漢字を見つけて書くことができましたね。」</p> <p>3 三と四の文を板書し、音読させる。 「平仮名の文です。漢字に直せるところを直して、ノートに書きましよう。」 C「東から風がふいてきました。」 C「春休みに本を読みました。」</p> <p>3 児童の日記等からとった例題を練習問題として行う。 「みなさんの日記の文から問題を考えました。同じように、ノートに漢字を使って書きましよう。」</p>	
		<p>【留意点】</p> <p>1 始めは、「二つ」と直す漢字の数を限定して問題を解かせる。既習の漢字が使えることを児童に伝える。</p> <p>2 次はすべて平仮名とし、漢字の数を限定しないで問題を解かせる。一つでも直せた児童を認め、漢字を使う意欲を高めるようにする。</p> <p>3 児童の作文やノートから出題することで、日常化につなげる。この際、児童の氏名は伝えないようにする。児童の作文を基にして、教師が作成してもよい。</p> <p>また、児童それぞれが書いた日記等の文章を自分で直させてもよい。</p>

6 文や文章の中で使うようにさせる指導について (2年)

【板書事項】

くらべてみよう

- ・ いぬははなをくちにくわえた。
- ・ 犬は花を口にくわえた。
- ・ とおくのやまで、とりがなく。
- ・ 遠くので、鳥が鳴く。

日記から

きょうは、はるらしいあたたかい
 春
 一日 休み
 いちにちでした。やすみだったので、
 お姉ちゃん
 わたしは、おねえちゃんといっしょ
 海 近く 歩き
 にうみのちかくをあるきました。す
 小さい貝
 ると、キラキラひかるちいさいかい
 見
 がらをみつつけて、とてもうれしくな
 りました。

【指導の流れ】

- 1 「この文を見て、何か気付いたことは
ありませんか。」
 C 「全部、平仮名で書いてある。」
- 2 「習った漢字を使って直してみましょ
う。」
 「比べてみて、どちらが読みやすいです
か。」
 C 「漢字にした方が、読みやすい。」
- 3 「習った漢字は、使うようにするとよ
いですね。」
 「ここに、平仮名だけで書かれた日記
があります。習った漢字を使って直
しましょう。」
 (全体で確認)
- 4 「日記や作文、ノートなどに書くとき
も、習った漢字を使うようにしまし
よう。」

【留意点】

- 1・2 導入として、平仮名だけの表記で
は読みにくい短文をあえて提示し、学習
した漢字を用いると意味がとらえやす
くなることに気付かせる。
- 3 より身近な感じがして取り組みやす
くなるよう、できるだけ児童が書いた作文
や日記などを用いるようにする。
- 4 平仮名だけの文を漢字に直させるだけ
でなく、漢字を正しく用いて書いている
例を紹介すると、さらに実践意欲の向上
につながる。